飛躍的な創造力醸成に関する研究
ー学生の意識調査からの考察ー

仁木　裕美*

目的：保育者・教育者を目指す学生が「創造力」をどのように捉えているかを整理しておくことは、保育者・教育者養成校の教育のあり方を検討する上で大きな意義がある。

方法：本学科の１年次生を対象に、創造力への認識、創造力に影響をあたえる要因、活動実態などを把握するために「創造力（クリエイティビティ）についての意識調査」を実施した。

結果：今回の対象者は「創造力」を芸術的才能のある人が先天的に持っているものではなく、育った環境や努力によって培われる後天的なものとして捉えていることが明らかになった。また、彼らの創造力に関する自己認識は、その有無に関わらず、他人との比較で発生している。自分は創造的ではないと思う学生は半数以上を占め、そのような学生の多くは、この先も自分の創造力は伸びないだろうというネガティブな感情を持っていることが確認された。創造力を育むための美術教育が創造力を失うきっかけになっていることも浮き彫りになった。また、この調査で「創造力」がないと思う学生の回答には共通して、明確な理由の欠如や曖昧さ、考えることからの逃避、感じることよりも知識優先という思考が特徴的にみられた。

結論：創造力は、主体的な活動や感性によって育まれる。今後は、美術教育を通して主体性やより豊かな感性を育み、自分は創造的であると思える自己肯定感を高める教育プログラムを検討することが必要であろう。

キーワード：創造性，創造力，クリエイティビティ，自己肯定感，美術教育

（2022年10月14日受付け、2022年12月7日受理）

はじめに

新型コロナウイルス感染症はデジタル社会を一気に加速させ、Society5.0の到来がいよいよ現実的なものとなった。このように変化が激しく不確実性の高まる時代においては、個人が自由に個性を発揮しながら、機械やAIでは代替できない付加価値の高い仕事、すなわち、創造的な知的活動を行うことが求められている。教育現場では、創造力を育むための教育実践に日々取り組んできており、筆者も、創造的な保育者・教育者を養成するための教育のあり方について研究を継続してきた[1)]。創造力を育むことは、本学のような保育者・教育者養成校の普遍的な目標でもある。

しかしながら、５か国（ドイツ、日本、オーストラリア、英国、米国）のＺ世代を対象にした調査、教室でのＺ世代未来をつくる（Adobe, 2017）によると、日本以外のＺ世代の４割程度が「自分たちは創造的である」と回答した一方で、「自分たちは創造的である」と答えた日本のＺ世代は、８％しかいなかったと報告されている[2)]。

一般の社会においても、昨今「創造性」はビジネスの成功には必要不可欠な要素として位置付けされており、創造的思考が脚光を浴びている[3)]。しかしながら、職場における「創造性」意識調査(2018)によると、日本のワーカーの46%は「創造性」を発揮することが月に一度もないか全くその機会がないと回答している[4)]。この結果は、調査対象となった６か国（フランス、ドイツ、日本、スペイン、英国、米国）の中で最も少ない。

このように、日本の教育現場や社会では、創造的な学びや仕事に取り組める自信が足りず、チャンスも少ないことが明らかになってきている。

吹氣[5)]は、「図画工作科における『創造力』という言葉に対する解釈が教員個々に委ねられ、結果として、『創造』の定義と、『創造力』を育成するための具体的な

＊大阪人間科学大学　人間科学部　子ども教育学科
＊責任著者：大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学　人間科学部　子ども教育学科
E-mail：h-niki@kun.ohs.ac.jp

指導の在り方等に関する研究も研究団体や各学校単位に委ねてきた」という可能性を指摘している。

このような背景を踏まえ、学生らが「創造力」をどのように捉えているかを整理しておくことは、これからの社会を担う保育者・教育者を養成するための教育のあり方を検討する上で大きな意義があると考える。

そこで、本学科の１年次生を対象に、創造力への認識、創造力に影響をあたえる要因、活動実態などを把握するために「創造力（クリエイティビティ）についての意識調査」を実施した。この調査結果を分析・考察し、本学に在籍する学生の諸相に応じた教育のあり方を検討したい。

方　法

（１）調査目的

学生の創造力（クリエイティビティ）への認識、創造力（クリエイティビティ）に影響をあたえる要因、活動実態などを把握する。

（２）調査対象者

子ども教育学科に在籍する１年次生（有効回答53、回答率94.6％）

（３）調査手法

Google formsによる無記名自記式質問紙調査

（４）調査時期

2022年９月27日、10月３日

（５）質問内容

質問項目については、Adobe（2020）の「日本の高校生の創造力（クリエイティビティ）に関する意識調査[9)]」を参考にした。

結　果

（１）創造力（クリエイティビティ）の定義

本調査では、多くの学生が「自分らしい個性を自由に表現する力」（44人/32.8%）、「何もないところから新しいものを生み出す力」（28人/20.9%）と捉えていることが明らかになった。一方で、「生まれ持ったもの」（15人/11.2%）や「一部の特別な人に備わった力」（２人/1.5%）など、創造力は先天的なものであると捉えている学生もいることがわかった。〈図１〉

（２）創造力（クリエイティビティ）の有無に関する自己認識

「どちらかと言えばないと思う」（19人/35.8%）が最も多く、「どちらかと言えばあると思う」（14人/26.4%）、「ないと思う」（12人/22.6%）、「あると思う」（８人/15.1%）と続いた。創造力の有無にかかわらず、「どちらかと言えば」を選んで回答しているのは全体の62.2%で、自信を持って回答することを避けている傾向

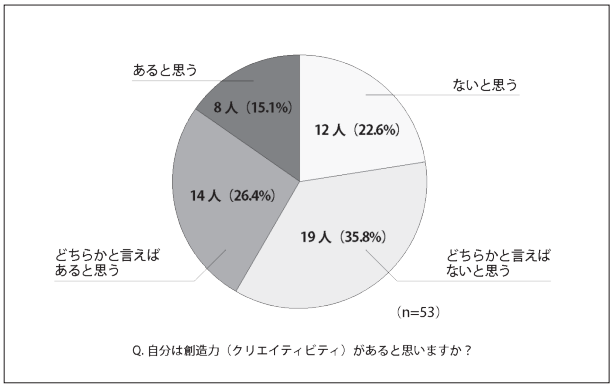

図２　創造力（クリエイティビティ）の有無に関する自己認識

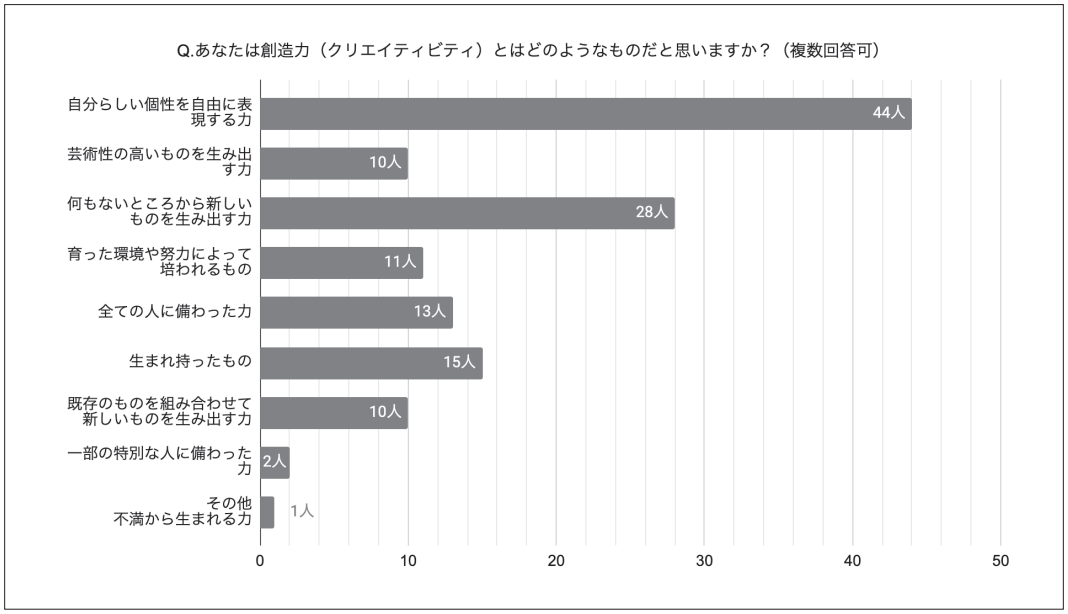

図１　創造力（クリエイティビティ）の定義

が見られる。また、全体的に「どちらかと言えばないと思う」「ないと思う」と回答した学生数は、「どちらかと言えばあると思う」「あると思う」と回答した学生数をやや上回った。〈図２〉

（３）自分には創造力（クリエイティビティ）がないと思う理由

（２）で「ないと思う」「どちらかと言えばないと思う」を選択した31名に対して、その理由を尋ねたところ、最も多くの学生（19人/26.4%）が、「周りにはもっと創造力のある人がいるから」と回答した。次いで「テレビやYoutubeに出てくる創造的な人とは違うから。そういうものは作れないから」「創作活動をしていないから」「何となく」（11人/15.9%）、「美術科目（美術や図工など）の成績が良くないから。美術科目が苦手だから」（９人/13.0%）と続く。また、２人/2.9%の学生は、先生や友人、家族から認められたことや褒められたことがないという経験をしている。これらのことから、自分に創造力がないと思う学生のほとんどが、他人と比べることや比較、評価されることで自信を失っていると言える。一方で、特別な理由もなく「何となく」自分には創造力がないと思っていることも明らかになった。〈図３〉

（４）創造力（クリエイティビティ）に自信を失った時期

（２）で「ないと思う」「どちらかと言えばないと思う」を選択した31名に対して、自信を失った時期を尋ねたところ、最も多かったのは「小学校４～６年生頃」（９人/29.0%）、次いで「小学校１～３年生頃」（６人/19.4%）であった。自分には創造力がないと思う学生の約半数は小学校で自信を失っていることになる。また、自分には創造力があると思ったことは一度もない人を除くと、小学校～中学校の間に自信を失った学生は全体の84.6%にも及んだ。〈図４〉

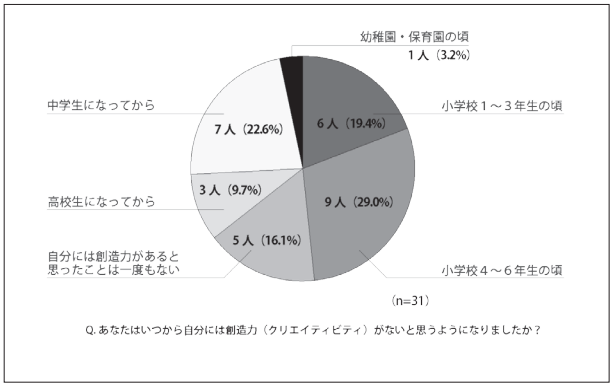

図４　創造力（クリエイティビティ）に自信を失った時期

（５）創造力（クリエイティビティ）に自信を失ったきっかけ

（２）で「ないと思う」「どちらかと言えばないと思う」を選択した31名に対して、どのようなことがきっかけで自分には創造力（クリエイティビティ）がないと思うようになったか、自由記述での回答を得た。その結果を、大まかにａ～ｅの５つに分類することができた。以下、一部抜粋したものを示す。

ａ．劣等感
- 友達の作品の方が褒められていたから
- 発想力が全然ないと思ったり周りと比べた時に劣っていると感じたから
- 周りの人たちの自由な発想を羨ましく思った 他

ｂ．制作が遅い
- 作品を作成するのが遅くていつも放課後残って

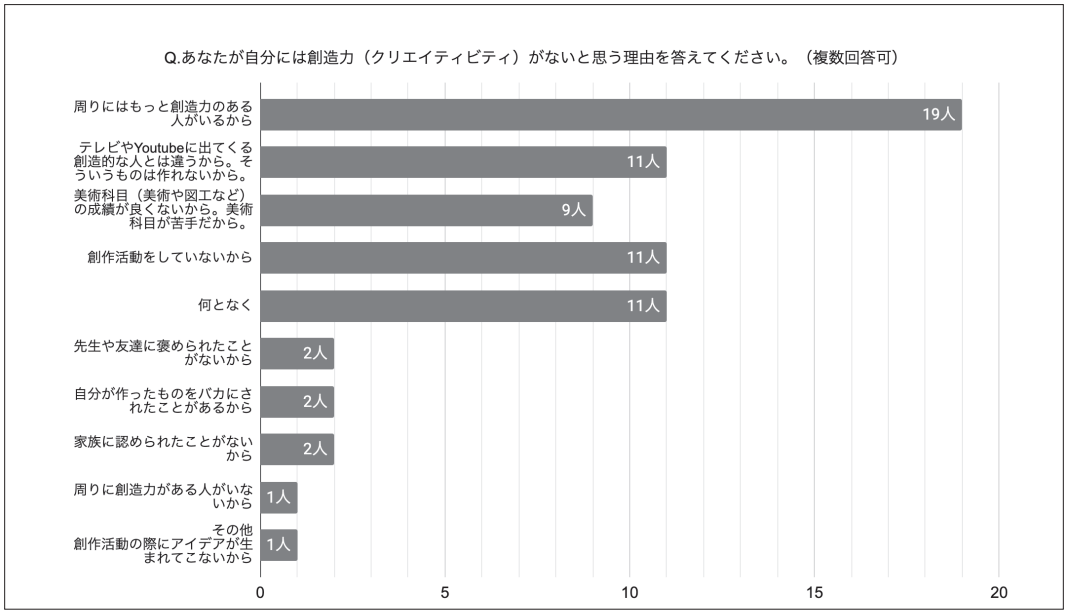

図３　自分には創造力（クリエイティビティ）がないと思う理由

仕上げていた
- ●美術の授業で周りの人がどんどん進めていく中で、自分はなかなか進めることができなかった 他

c．アイデアが浮かばない、思い通りに作れない
- ●絵を描くとか、作品を作るとかの時に、なかなか案が出てこないし、いいものができない
- ●何かを考えて作る時に何も思いつかなかったこと
- ●作っても上手くいかなかったりしたから 他

d．屈辱
- ●不器用と言われた
- ●周りに絵が下手だと言われたから 他

e．その他
- ●いつのまにか
- ●何となく 他

回答を概観すると、劣等感を感じたり屈辱を受けたりなど、他人との比較や評価によるもの、また、アイデアが浮かばない、時間内に作ることができないなどが自信を失うきっかけになっている。ここで注目したいのは、自由記述には「教室」というワードは一度も出てこなかったが、記述内容を俯瞰的にみると、自信を失ったきっかけの多くが教室の中で行われているであろう内容であったことである。教育の場である学校で、本来育まれなければいけないものがむしろ失われている現状が見える。

（6）自分には創造力（クリエイティビティ）があると思う理由

（2）で「あると思う」「どちらかと言えばあると思う」を選択した22名に対して、その理由を尋ねたところ、37.9%の学生が、特別な理由もなく「何となく」あると回答している結果となった。次いで、24.7%の学生が「周りの人と比べると自分は創造力があると思うから」、13.8%の学生が「美術科目（美術や図工など）の成績が良いから。美術科目が得意だから」と回答した。創造力がないと思う理由と同様に、周りの人との比較が一番の理由になっていることがわかる。また、先生や家族、友人から褒められる経験も重要であるとも言える。〈図５〉

（7）創造力（クリエイティビティ）に自信を持った時期

（2）で「あると思う」「どちらかと言えばあると思う」を選択した22名に対して、自信を持った時期を尋ねたところ、「小学校１～３年生頃」と「中学生になってから」が、それぞれ５人/22.7%で最も多い結果となった。次いで、「小学校４～６年生頃」と「幼稚園・保育園の頃」が４人/18.2%となっている。創造力に自信を失った時期〈図4〉で多いのも小学校から中学校にかけてであり、この時期が子どもにとって創造力に自信を持つか失うかの重要な時期であると言える。〈図６〉

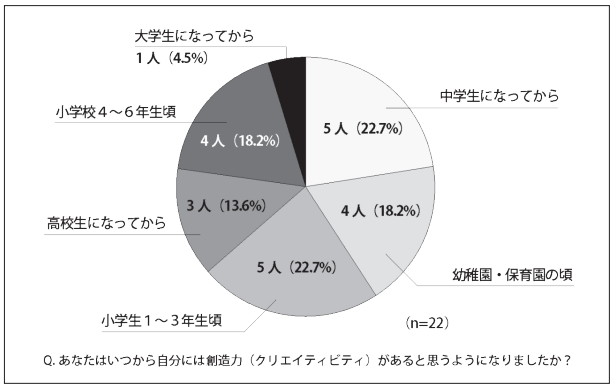

図６　創造力（クリエイティビティ）に自信を持った時期

（8）創造力（クリエイティビティ）に自信を持ったきっかけ

（2）で「あると思う」「どちらかと言えばあると思う」を選択した22名に対して、どのようなことがきっかけ

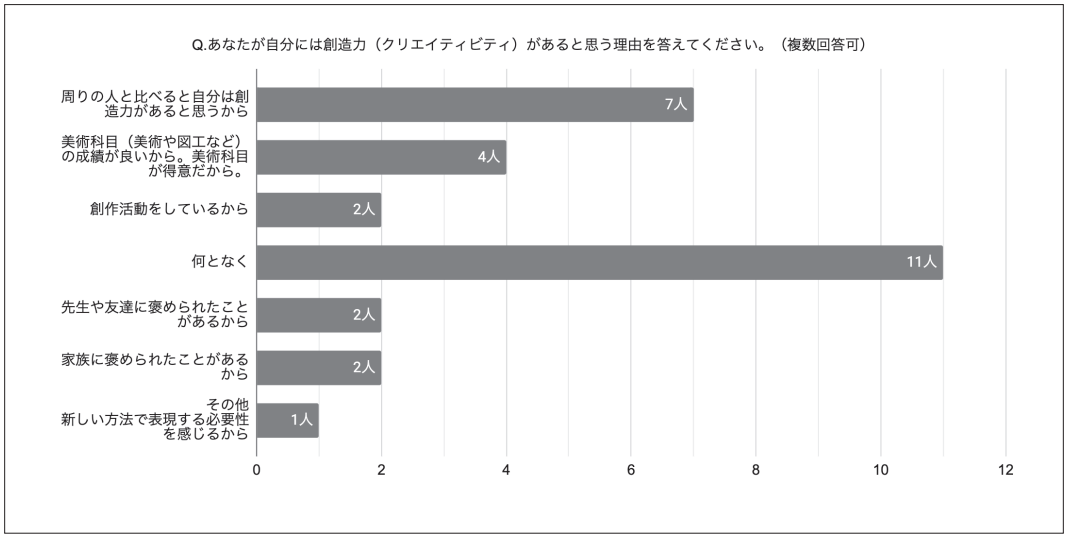

図５　自分には創造力（クリエイティビティ）があると思う理由

で自分には創造力（クリエイティビティ）があると思うようになったか、自由記述での回答を得た。その結果を大まかに２つに分類した。以下、一部抜粋したものを示す。

ａ．周りからの評価
- ●色々作るのが好きで、それを家族に褒められたこと
- ●他のみんなと違うような観点で作品を作っていたことが多かったから 他

ｂ．アイデアが浮かぶ、思い通りに作れる
- ●いいアイデアを思いついた時
- ●自由に表現していてユニークなものが作れるから
- ●漫才を友人と作った時 他

ｃ．その他
- ●いつのまにか
- ●何となく 他

ａのように、作品を褒められたり評価されたことで自信に繋がったケースが多く見られた。また、ｂのように、アイデアが出てきて思い通りに作れたり、過去の経験がきっかけになっているものもあった。一方で、「なんとなく」など、特に理由がわからない回答もあった。

（９）学生の日常的行動

14項目の中で行ったことがあることと、普段からよく行っていることを質問し、学生が日常的にどのような行動をしているかを調査した。

普段から、47.2%の学生が写真を撮影し、28.3%の学生が写真の加工を行い、15.1%の学生が動画の編集まで行っている。しかしながら「アプリケーションを作る」においては極端に下がり、88.7%の学生が行ったことがないと回答した。「オリジナルダンス」「作詞・作曲・編曲」「アクセサリーや小物を作る」「イベントを企画する」ことを普段から行っている学生は、5%以下であった。これらのようなスマホを用いない創作活動については低い傾向がある。学生の日常的な行動の多くは、スマホに依存した行動であるとも取れる。〈図７〉

(10) クリエイティブな活動をするために必要なこと

クリエイティブな活動をするために必要なこと９項目について、そうだと思うもの全てを選択してもらう質問をした。項目の中にない回答は、その他で自由記述してもらった。その結果「誰かに伝えたい思いがあること」が31人で最も多く、「共感してくれる友達やコミュニティ」(30人)、「経験」(28人)、「才能」(27人)と続いた。次いで「手伝ってくれる人」が必要と考える学生は20人おり、クリエティブな活動は一人ではできないと考えていることが示唆された。〈図８〉

さらに、クリエイティブな活動をするために必要なことを自己認識別に見ていきたい。ここでは、創造力（クリエイティビティ）の有無に関する自己認識のアンケート結果〈図２〉より、自分は創造力（クリエイティビティ）が「あると思う」「どちらかと言えばあると思う」を「創造的だと思っている」群とし、「ないと思う」「どちらかと言えばないと思う」を「創造的だと思っていない」群とする。以降の自己認識別の集計はこの条件に従う。

自己認識別では「道具やツールの使い方など教育」で自分を創造的だと思っている学生と思っていない学生との差が大きく開いた。また、「才能」「親の理解」については、自分を創造的だと思っている学生の方が必要と感じている割合が高くなった。それ以外の項目については、自分を創造的だと思っていない学生の方が必要性を感じている割合がやや高くなった。〈図９〉

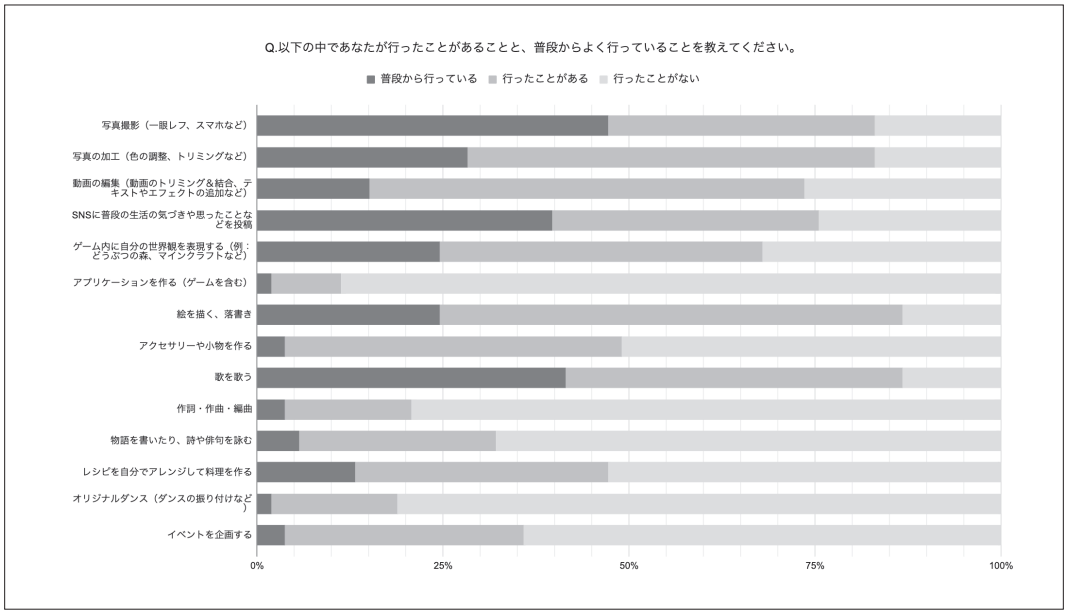

図７　学生の日常的行動

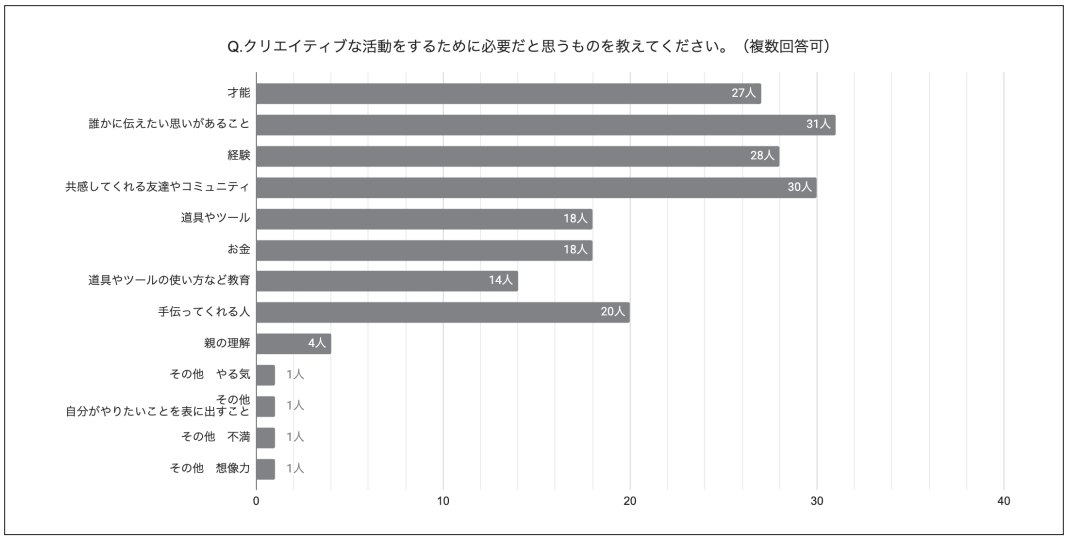

図８　クリエイティブな活動をするために必要なこと

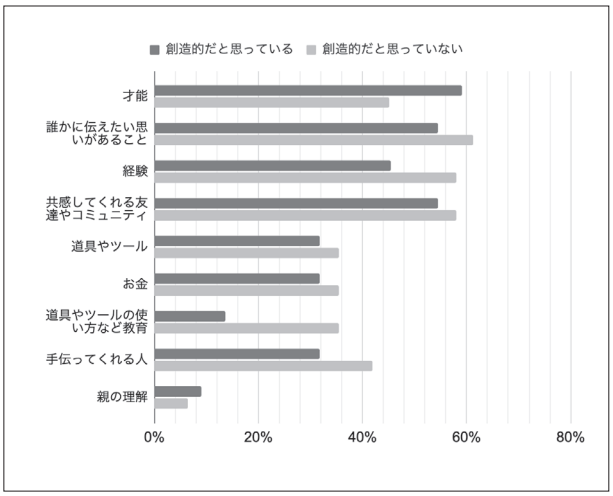

図９　クリエイティブな活動をするために必要なこと（自己認識別）

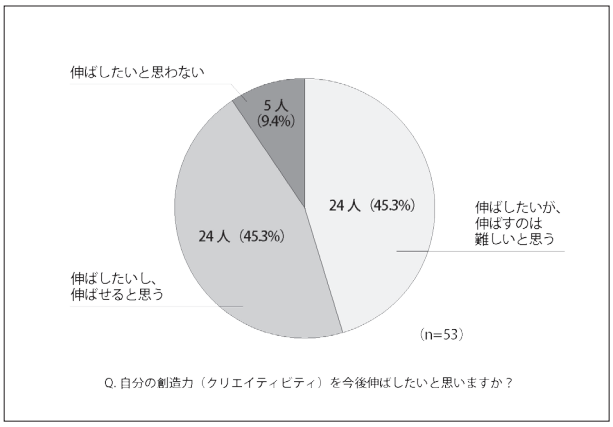

図10　自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待

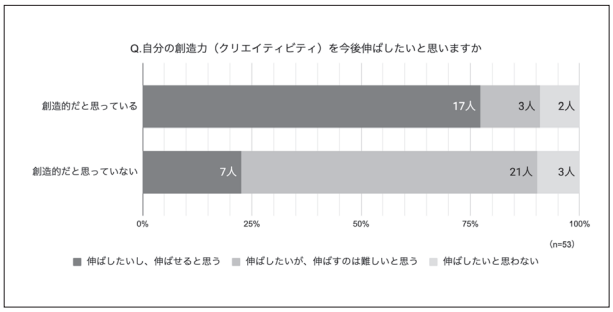

図11　自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待（自己認識別）

（11）自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待

「自分の創造力（クリエイティビティ）を今後伸ばしたいと思うか」の質問に対して「伸ばしたいし、伸ばせると思う」と回答した学生は24人/45.3%であり、自分の創造力の今後に期待している学生の割合は半数以下となった。また、「伸ばしたいが、伸ばすのは難しいと思う」と回答した学生は24人/45.3%であり、伸ばせると思うか、難しいと思うかを問わず、創造力を伸ばしたいと思う学生は全体の48人/90.6%に達した。また、５人/9.4%は「伸ばしたいと思わない」と回答した。〈図10〉

さらに、自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待を自己認識別に見ていきたい。〈図11〉は、〈図10〉の自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待を自己認識別に示したものである。

自分を創造的だと思っている学生の77.3%（17人）は、創造力を伸ばしたいし、伸ばせると思っており、自分を創造的だと思っていない学生の22.6%と比較して優位に数値が高い。一方、自分を創造的だと思っていない学生の67.7%（21人）は、創造力を伸ばしたいが、伸ばすのは難しいと思っており、自分を創造的だと思っている学生の13.6%と比較して優位に数値が高い。また、創造力の自己認識の有無に関わらず、「伸ばしたいと思わない」学生は9%前後存在する。この結果から、自分

には創造力があるという自己認識は、学生のこれからの学びや成長に大きく寄与するのではないかということが示唆された。

（12）自分の創造力（クリエイティビティ）を伸ばしたいし、伸ばせると思う理由と伸ばせない・伸ばしたくないと思う理由

（11）でなぜそのような回答をしたのか、その理由を自由記述で尋ねた。その結果をワードクラウドで可視化した。

自分の創造力（クリエイティビティ）を伸ばしたいし、伸ばせると思う理由で多かったのは、より創造力豊かになることで、可能性を広げようとしている回答である。

【回答の抜粋】〈図12a〉

- もっと創造力豊かな人になりたいから
- これから色々な経験をしていくと思うから、そこからまだまだ創造性が伸びてくると思うから
- 創造力が今の段階でまだまだなので、様々なことを挑戦する中で良くなっていくと思うから 他

一方で、自分の創造力（クリエイティビティ）を伸ばせない・伸ばしたくないと思う理由については、才能を持ち合わせていないことに対する諦めの回答が多かった。

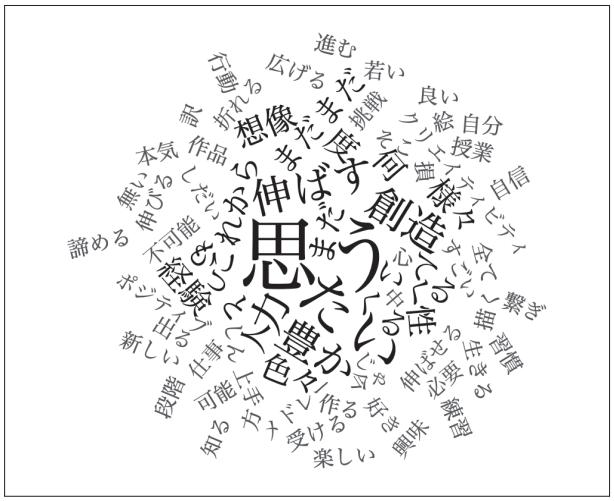

図12a 伸ばしたいし、伸ばせると思う理由のワードイメージ

【回答の抜粋】〈図12b〉

- 小学校、中学校、高校でやってきて創造力があると実感することができていないから
- 自分には才能がないから
- 伸ばし方が分からないから 他

（13）創造力（クリエイティビティ）を伸ばすために期待するサポート

（11）で、自分の創造力（クリエイティビティ）を今

図12b 伸ばしたいが、伸ばすのは難しいと思う理由のワードイメージ

後伸ばしたいと思うかどうかの質問で「伸ばしたいし、伸ばせると思う」と回答した学生24人に、これから自分の創造力を伸ばすに当たって、大学・社会・家庭からどのようなサポートが受けられたらいいと思うか、期待することを自由回答で記述してもらった。その結果をワードクラウドで可視化することで、学生が期待しているサポートの概観を試みた。

Q．これから自分の創造力を伸ばすに当たって、どのようなサポートが受けられたらいいと思いますか？以下の団体に対し期待することを教えてください。

①大学への期待するサポート

大学への期待するサポートとしては、創造性を刺激するような「環境」を期待している声が多かった。

【回答の抜粋】〈図13a〉

- 成長しやすい環境
- 様々なアートに触れることができるようにして欲しい

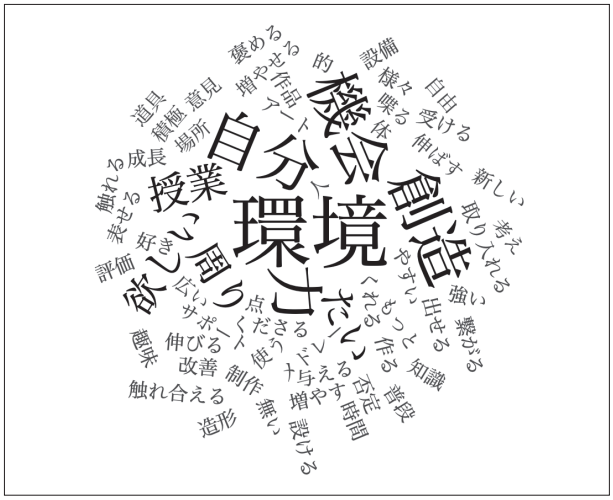

図13a　大学に対して期待することのワードイメージ

●広い場所と人の作品に対して否定をしないこと 他

②社会への期待するサポート

社会への期待するサポートとしては、自分という人間を「受け入れて欲しい」「個性を認めて欲しい」という期待が強く現れていた。

【回答の抜粋】〈図13b〉

●自分の価値観を押し付けてこないこと

●個性を潰さないで欲しい

●受け入れてくれる 他

図13b　社会に対して期待することのワードイメージ

③家庭への期待するサポート

家庭への期待するサポートとしては、自分のことを認めてもらいながら、協力や応援を期待している声が多かった。一方で、特にないとの回答も多かった。

【回答の抜粋】〈図13c〉

●自分のことを受け入れてもらうこと

●応援・協力・理解

●特になし 他

この３つの対象に対して期待するサポートの声を概観してみると、それぞれ若干の期待の違いはあるが、

図13c　家庭に対して期待することのワードイメージ

創造力を伸ばすために、大学・社会・家庭から具合的な何かを得ようとしているというよりも、個性を持った自分という人間を受け入れて欲しいと願っている傾向が高いことが見えてくる。さらに、創造力は、自分をクリエイティブな環境におくことで伸ばしていけるものとして捉えていることが示唆された。

(14) 創造的だと思う有名人

学生が、最も創造的だと思う有名人とそう思う理由（自由記述）について質問した。その結果、ピカソが20ptを集め１位となった。理由としては「芸術的な絵を描いているから」「授業で習って創造的だと思った」などが多かった。２番目に多かったのは「わからない」である。理由としても「思いつかないから」「知らないから」という回答がほとんどであった。続いて、嵐の大野智、岡本太郎、ゴッホと続いた。６位以下は全て１ptずつの獲得であったが、タレント、お笑い芸人、画家、音楽家、哲学者、ユーチューバー、インフルエンサーのジャンルから様々な名前が挙がった。〈図14〉

Q.あなたが最も創造的だと思う有名人は誰ですか？

順位	有名人（※敬称略）	pt	理由（抜粋）
1	ピカソ	20	独創的な絵を描いたり評価されているし自分には何を書いているかわからないくらい美術家たちにはすごいと言われているから 他
2	わからない	6	知識がないから 他
3	大野　智（嵐）	3	色々な作品をみてすごいと感じたから 他
4	岡本太郎	2	太陽の塔など、独創的な作品を生み出しているから　他
5	ゴッホ	2	有名な作品を沢山残しているから 他

図14　創造的だと思う有名人とその理由

(15) 創造力（クリエイティビティ）と自己肯定感

学生の自己肯定感を確認するため、６つの項目についてそれぞれどの程度当てはまるかを全ての学生に尋ねた（n=53）。

その結果、49%の学生が、自分は困難に直面しても乗り越えられる、43.4%の学生が、自分は将来成功することができる。夢をかなえられる。と思っていることが明らかになった。一方で、自分には周囲の力を変える力があるかについては、32.1%の学生が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答しており、他項目と比べて圧倒的に低い割合であった。この項目に関しては、15.1%の学生が「全く思わない」と回答しており、他項目と比べて圧倒的に高い割合でもある。「社会の中で自分らしく生きていける」「自分は仲間と一緒に何かを成し遂げることができる」については、自己肯定感が最も高い結果となった。

全体の結果より、自分は周囲に影響を及ぼすほどの力はないが、仲間と一緒なら社会の中で何かを成し遂げられると思っていることが示唆された。〈図15〉

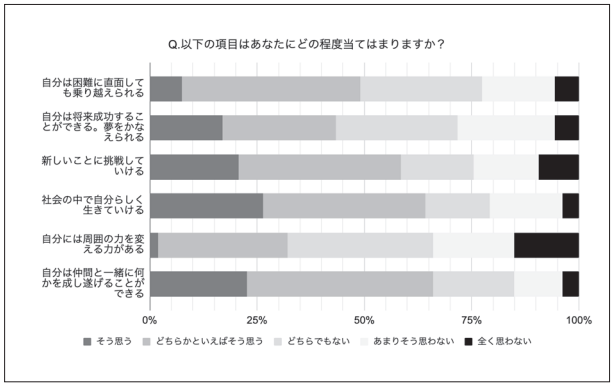

図15　創造力（クリエイティビティ）と自己肯定感

次に、創造力（クリエイティビティ）と自己肯定感の関連を見るために、自己認識別に見ていくことにする。以下、〈図16〉～〈図21〉は、創造性に関する自己認識別（創造的だと思っているn=22、創造的だと思っていないn=31）の回答結果として集計したものである。

自分は困難に直面しても乗り越えられるかどうか〈図16〉について、「そう思う」を選んだ学生は、全員が自分のことを創造的だと思っていることがわかる。自分のことを創造的だと思っていない学生で「そう思う」を選んだ学生は皆無だった。

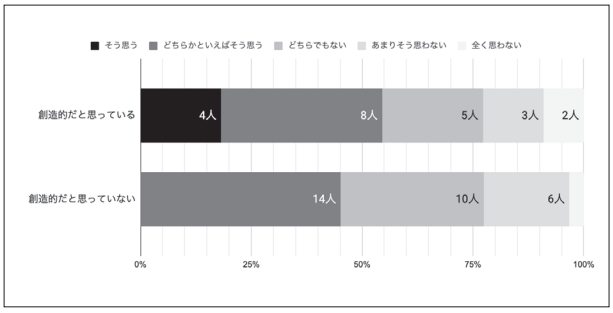

図16　自分は困難に直面しても乗り越えられる（自己認識別）

自分は将来成功することができる。夢をかなえられるかどうか〈図17〉について、自分のことを創造的だと思っている学生の内31.8%（７人）は、夢をかなえられたり、将来成功する可能性に期待している。一方で、自分のことを創造的だと思っていない学生で、将来成功する可能性に期待しているのは、わずか6.5%（２人）であった。

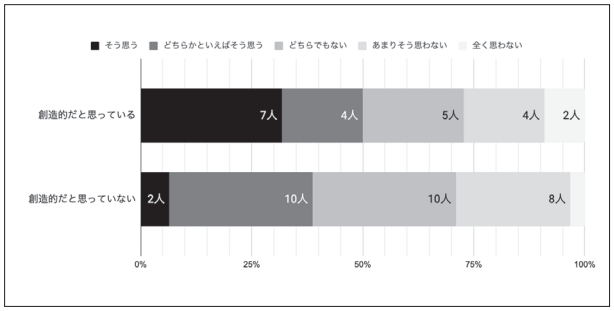

図17　自分は将来成功することができる。夢をかなえらえる（自己認識別）

新しいことに挑戦していける〈図18〉について、「どちらかといえばそう思う」を含めると、自分のことを創造的だと思っている学生の内68.2%（15人）は、新しいことに挑戦していけると思っている。一方で、自分のことを創造的だと思っていない学生でも、51.6%（16人）は、新しいことに挑戦していけると思っていることがわかる。しかし、自分のことを創造的だと思っていない学生は、新しいことに全く挑戦できないと考えている傾向も強い。

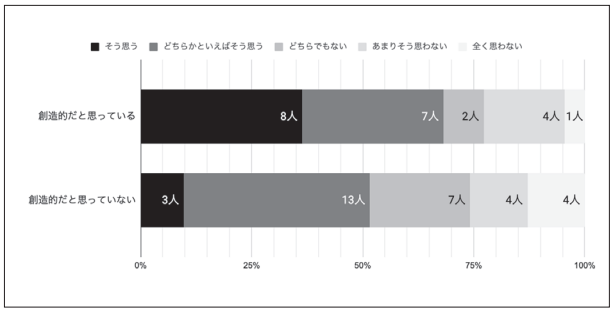

図18　新しいことに挑戦していける（自己認識別）

社会の中で自分らしく生きていける〈図19〉では、自分のことを創造的だと思っている学生の内、「どちらかといえばそう思う」も含めると、81.9%（18人）は社会の中で自分らしく生きていけると思っていることがわかる。一方で、自分のことを創造的だと思っていない学生の中で、社会の中で自分らしく生きていけると思っているのは51.6%（16人）にとどまった。

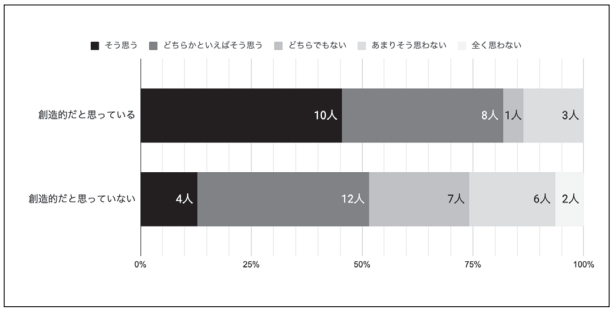

図19　社会の中で自分らしく生きていける（自己認識別）

自分には周囲の力を変える力がある〈図20〉では、「どちらかといえばそう思う」も含めると、自分のことを創造的だと思っている学生の40.9%（９人）は、自分には周囲の力を変える力があると思っていることがわかる。一方で、自分のことを創造的だと思っていない学生は、25.8%（８人）にとどまり、「そう思う」と回答した学生は皆無だった。

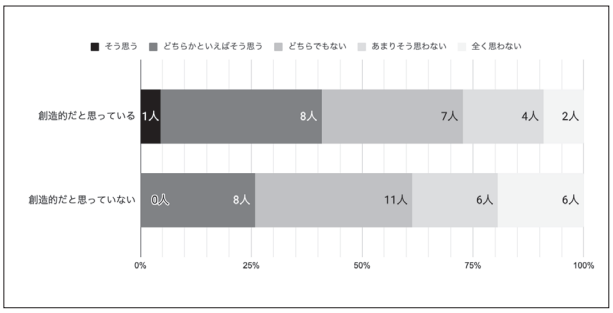

図20　自分には周囲の力を変える力がある（自己認識別）

自分は仲間と一緒に何かを成し遂げることができる〈図21〉では、自分のことを創造的だと思っている学生の40.9%（９人）は、仲間と一緒に何かを成し遂げることができると強く思っていることがわかる。一方で、自分のことを創造的だと思っていない学生は、9.7%（３人）にとどまり、大きく差が開いた。

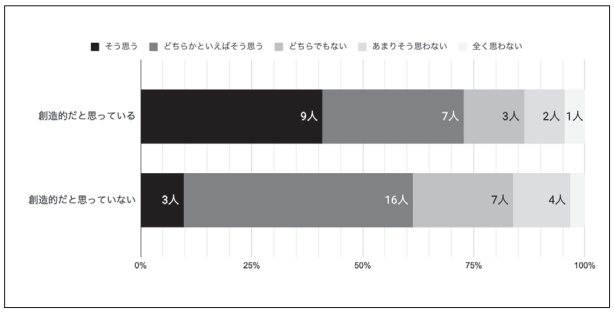

図21　自分は仲間と一緒に何かを成し遂げることができる（自己認識別）

結果全体を見ると、自分のことを創造的だと思っていない学生は、自分のことを創造的だと思っている学生に比べて、全ての質問項目において「どちらでもない」を選ぶ割合が高いことがわかる。このことから、自分のことを創造的だと思っていない学生は、自己を肯定するための根拠が明確でなく、どこか曖昧なところがあると言える。

また、自分のことを創造的だと思っている学生は、自分のことを創造的だと思っていない学生に比べて「そう思う」と回答する割合が高いことがわかる。自分のことを創造的だと思っている学生は、自己を肯定するための根拠を明確に持っているということが示唆された。しかしながら、自分のことを創造的だと思っていても、自己肯定感が低い学生も存在し、一方では、自分のことを創造的だと思っていなくても、自己を肯定している学生も多数いることが明らかになった。

考　察

以下に調査結果を踏まえた考察の概要を示す。

１．創造性とは

「創造性」の定義や解釈は、文献によって様々である。また、個人や世代を超えて捉え方が変化し、その定義や解釈の範囲も広がっている。

日本創造学会では、「創造とは、人が異質な情報群を組み合わせ統合して問題を解決し、社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むこと」と定義されている[6)]。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説図画工作編では、「創造」を明確に定義しているわけではないが、教科の目標（２）の解説において、「創造的に発想や構想をし、とは、自分にとって新しいものやことをつくりだすように発想や構想をすることである。」と示されている[7)]。つまり「創造」は「自分にとって新しいものやことをつくりだすこと」であると解釈できる。

立花ら[8)]は、「一般の社会で使用される創造性の意味と、学校の子どもの創造性の意味には違いがある」ということを指摘している。「社会の創造性には新規性や独創性が求められる。つまり、これまでは知らなかったことを考え出すことと捉えられている。一方で、学校での創造性は、個人の中での新規性であり、社会ではすでに既知のことでも、子どもにとっては新しい発見をするときも創造したことになる」と述べており、本論での創造性は後者のことを指すことにする。

また、創造性と創造力との扱いについて、英語筆記ではどちらもcreativityとなるが、本稿では、創造性を「物を新しく生み出す（創造する）ことのできる性質」、創造力を「創造性を具現・発揮できる能力のこと」としたい。アンケート調査の質問項目については、学生に内在する力や能力としてのcreativityを問いたいため、「創造力（クリエイティビティ）」の表記を使用した。

２．学生にとっての「創造力」とは

調査対象となった学生らは「創造力」を「自分らしい個性を自由に表現する力」、「何もないところから新しいものを生み出す力」として捉えている。また、創造力は先天的なものではなく、育った環境や努力によって培われる後天的なものとして捉えていることが明らかになった。しかし、自分の創造力を伸ばすために最も必要なものは「才能」であるという回答も多く、彼らが考える創造力への定義とは矛盾する結果となっている。このことから、学生の中には、先天的な才能が創造力を決定するという意識が潜在的に隠れている可能性が示唆される。

３．創造力に関する自己認識は他人との比較で生まれている

自分は創造力がないと思う理由、あると思う理由として最も多いのは、「周りにはもっと創造力のある人がいるから」「周りの人と比べると自分は創造力があると思うから」であった。つまり、彼らの創造力に関する自己認識は「ある」「ない」に関わらず、他人との比較

で生まれているということにも注目したい。このことから、彼らは主体的に判断することができていないことが示唆される。それは、これまでの教育で「感じることよりも知識」を優先させてきた結果であろう。(14)で、創造的だと思う有名人を選んだ理由の際も「知識がないから」「有名な作品を沢山残しているから」など、「～と言われているから」という回答が多いこととも一致する。

４．創造力がないと思う学生

自分を創造的ではないと思っている学生は半数以上に及び、創造的ではないと思うようになった時期は、小学校に入ってからが多数を占める。自分に創造力がないと思う学生は、創造性を育むための小学校図画工作科によって、むしろ自信を失っていることになる。

自分の創造力（クリエイティビティ）の今後に対する期待（自己認識別）〈図11〉で顕著に表れたが、自分を創造的ではないと思っている学生の67.7%は、創造力を伸ばしたいが難しいとも思っている。一方、自分を創造的だと思っている学生の77.3%は、創造力を伸ばしたいし伸ばせると思っている。このような圧倒的有意な差、つまり、自分自身を創造的だと思うか思わないかは、今後の大学での学びや成長に大きく影響を及ぼす可能性が高い。したがって、養成校では、自分は創造的であると思える自己肯定感を育むことが必要であろう。そういう意味では、初年次教育がいかに重要であるかは自明である。さらに、今回の調査では大学の環境面でサポートを期待する声も多いが、当然クリエイティブな環境である必要性があるだろう。それが美術室だけであってはいけないということである。

また「創造力」がないと思う学生の回答には共通して「なんとなく」という明確な理由の欠如や「どちらかというと」という曖昧さ、「わからない」という考えることからの逃避、「感じることよりも知識優先」という思考が特徴的にみられることも確認することができた。顕在化したこれらの要素は、彼らの圧倒的な体験不足から来るものではないだろうか。

結　論

今回の調査によって、本学科１年次生の創造力（クリエイティビティ）への認識、創造力（クリエイティビティ）に影響をあたえる要因、活動実態などを概括的に把握することができた。「創造力」は誰もが持ち得ている。そして、その創造力は、主体的な活動や感性によって育まれる。感性は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造力を育む重要なものである。したがって、主体的に活動し、感性を育む美術教育の担う役割は大きい。

保育者・教育者養成校として、今後は、子どもたちの創造力を育む教育活動を展開できる教員の養成が重要であることは言うまでもない。自分は創造的であると思える自己肯定感を高めること、学生らを取り巻く環境がクリエイティブであること、主体的に活動し、より豊かな感性を育む教育プログラムを検討することが課題であると言える。さらに、学生の創造性に関する意識がどのように変化したかを追跡調査することで、その教育プログラムの有効性を図りたい。

引用文献

１）仁木裕美，岡田雅樹，釣井達也．小学校教員養成課程における創造的な教員を養成するための研究～ STEAM 教育を基盤とした初年次教育の可能性と課題～．大阪人間科学大学紀要．2021;20:51-58

２）Adobe, Gen Z in the Classroom: Creating the Future（教室での Z 世代：未来を作る）2017,（2022年10月12日閲覧，http://www.adobeeducate.com/genz/creating-the-future-JAPAN）

３）トム･ケリー＆デイヴィッド･ケリー. クリエイティブ・マインドセット．日経 BP 社．2018，19

４）Steelcase，職場における「創造性」意識調査．Steelcase．2018，7

５）吹氣弘髙．小学校高学年の描画指導における模倣と創造力に関する一考察．中村学園大学発達支援センター研究紀要．2017;8:89-95

６）日本創造学会，創造の定義，（2022年10月8日閲覧，http://www.japancreativity.jp/definition.html）

７）文部科学省．小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「図画工作編」．日本文教出版．2018，14

８）立花正男．草薙宥映．創造性を育む教育．岩手大学大学院教育学研究科研究年報．2021;5:117-128

９）Adobe，日本の高校生の創造力（クリエイティビティ）に関する意識調査(2020)，（2022年10月12日閲覧，https://www.adobe.com/jp/news-room/news/202011/20201125_adobe-research-for-highschool-students-and-creativity.html）

Enhanced Creativity : Considerations from a Survey of Students' Attitudes

Hiromi NIKI, MA*

Objectives : Organizing how students who aim to become childcare workers and educators perceive "creativity" is of great significance when examining the ideal form of education at training schools for childcare workers and educators.

Methods : We conducted an "Awareness Survey on Creativity" targeting first-year students in the Department of Child Education at our university in order to understand their perception of creativity, the factors that affect creativity, and the actual state of their activities.

Results : It became clear that they do not perceive "creativity" as something that is innately possessed by people with artistic talent, but as something acquired through their upbringing environment and efforts. More than half of the students think that they are not creative, and it was confirmed that many of these students have negative feelings that their creativity will not grow in the future. In addition, in this survey, the responses of students who thought they lacked creativity were characterized by lack of clear reasons, ambiguity, escaping from thinking, and prioritizing knowledge over feeling.

Conclusions : In the future, it will be important to nurture independence and richer sensibilities through art education, and foster a sense of self-affirmation at an early stage in first-year university education that makes one think that one is creative.

Key Words : Creativity, Self-esteem, Art education

（Received in Oct 14, 2022, Accepted in Dec 7, 2022）

* Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences.
* Corresponding author : Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan.
E-mail : h-niki@kun.ohs.ac.jp